小山工業高等専門学校研究紀要
第三十二号（二〇〇〇）二〇三―二一二

曹操と華佗

CAOZAO and HUATUO

中田伸一
Shinichi NAKADA

一　はじめに

「三国志外伝――曹操と華佗」（一九八四年・黄祖模監督）という映画がある。曹操の侍医をつとめていた華佗が、妻の病気を理由に帰郷したまま戻らなかったため、逮捕されて獄死するという悲話である。千八百年もの昔、彼は腹部の切開手術をすることができた。患者に「麻沸散」という麻酔薬を飲ませて眠らせている間に、内蔵の切除や縫合をして完治させた。しかし、「麻沸散」も医術も伝わらなかった。獄中で医書をまとめ獄吏に託そうとしたが、後難を恐れた獄吏に拒まれたため、火をもらい自ら燃やしてしまった。程なくして、曹操の最愛の息子、曹沖が十三歳で病死する。華佗は病弱の彼に薬を処方したことがあったが、華佗の亡き後、彼を救える名医はいなかった。後継者候補を失った曹操は涙を隠さなかった。華佗なら救えたものを、取り返しのつかないことをした、と嘆き悲しむ場面で映画は終わる。

脚本のもとになったのは、陳寿の著した『魏書』巻二九の華佗伝である。夭折した曹沖の伝記は『魏書』巻二十に見える。彼の賢さを物語るエピソードとして、「倉舒　象を称る」という、わが国の漢文教材にもなっている話がある。あるとき呉の孫権が象を贈ってきた。曹操はその目方を群臣に尋ねたが誰も答えない。幼い曹沖は意見を述べた。象を船に乗せて吃水線を調べ、次に象を降ろし、同じ吃水線に沈むまで積んだ荷物の重量をはかれば、それが象の目方だ、と。父はその提案を喜び、実行に移した。

こんな話もある。あるとき、倉庫に保管していた曹操の馬鞍がネズミにかじられてしまった。倉庫役人は厳罰は免れまいと恐れた。彼はこの役人を哀れみ、一計を案じた。自分の服がネズミにかじられたように工作し、憂いに沈んだ顔で父親にまみえた。父親は事情を聞いてなぐさめた。そして、息子の服がやられるくらいだから、馬鞍がかじられても仕方がないと思い、倉庫役人の罪を責めなかった。このような曹沖の機転により処罰を免れた者は数十人に及んだという。

曹操はときどき悪性の頭痛に悩まされた。過剰なストレスが発作を助長したのであろう。頼みとしていた華佗が暇をとって帰郷したまま戻らないので、何度か書簡を送ったり、迎えの使者を派遣した。しかし応じないのに腹を立て、強権を発動した。許昌の獄につなぎ、拷問して死に至らしめた。その後、愛児を失った。『魏書』は言う。

愛子の倉舒　病み苦しむ。太祖嘆いて曰く、吾　華佗を殺ししを悔やむ。此の児をして彊死せしめたり。

曹沖の死を記した『魏書』の文章は簡潔である。

年十三、建安十三年、疾病あり。太祖（曹操）親（みずから）ら為に請命す。亡（し）に及んで哀しむこと甚だし。

曹沖の急死は曹操の後継者構想を狂わせた。彼には十三人の婦人に生ませた二十五人の男児がいたが、曹沖こそ最もふさわしいと考え、そのことを重臣たちに漏らしていた。曹沖の死んだあと、曹丕（後の文帝）に、こんな皮肉を言った。「沖の死は、我の不幸であるが、おまえにとっては幸いであろう。」と。その後、同じころ死んだ甄（しん）という家の娘と合葬、つまり冥婚させ、さらに騎都尉の官職を追贈して、父親として最大限の哀悼を示した。

曹沖の死は、右のとおり、建安十三（二〇八）年と明示されているが、華佗の方は特定できない。その少し前、と推測するしかない。なお、前年の十二年の曹操は夏から冬にかけて北地に遠征して烏丸との戦いに忙殺されていた。翌年正月、鄴に帰還するとすぐに南方遠征の

中田　伸一

準備にかかった。当時五十二、三歳、最も覇気に満ちていた時期であった。このころ建安七子の一人である孔融の言動が曹操に嫌われ、刑場の露と消えている。戦争のはざまに起った出来事に違いなく、曹操にとってみれば、専制体制を強化し、部下の忠誠心を高めるには、反抗的な人物を処刑して恐怖心をあおるのがてっとり早かった。

華佗あるいは孔融を殺したころから、彼の身辺には不運や不幸が目につく。その第一弾は曹沖の夭折であり、続いて赤壁における敗戦である。その四年後、能吏の誉れの高い荀彧（じゅんいく）の政治生命を奪った。その二年後の建安十九年、後漢の献帝の皇后伏氏とその父、伏完の曹操暗殺計画が露見し、先手を打って一族を皆殺しにした。天下は孫権、劉備の三局に分裂して戦争は慢性化し、死の直前まで戦争と縁が切れなかった。最後に六十五歳で出陣したときは劉備と戦ったが勝てず、兵力を消耗して撤退した。結局、皇帝の玉座につくこともなく、後世の人々には姦雄呼ばわりされ、小説や戯曲のなかでは常に悪役である。なお、小説の『三国志演義』では、第七十八回に華佗殺しのことが出てくる。曹操は彼の手腕を信じ切れず、疑心暗鬼を生じて殺害する。その直後、老いた独裁者は夜になると奇怪な悪夢に翻弄される。数々の悪業の報いがこのころ一気に噴き出してくる。

一方の華佗は、民衆の心の中に「神医」として生き続ける。その名声は、中国のみならずわが国の医学界、とりわけ外科の分野で高かった。いったい華佗とはどんな医者なのか、映画に端を発した興味を一歩すすめて、解明を試みた。次の第二節では、正史のなかでどのように扱われ、どのように記述されているかを調べる。第三節では、正史から窺える当時の医者の社会的な地位について検討する。第四節では、華佗の医術の実態を調べ、第五節で総括をする。

二　ゆがめられた華佗像　――――　「史臣の曲筆」について

華佗の故郷は沛国の譙県、今の安徽省亳州市である。淮河流域の平原地帯にある。近年、北京と香港を結ぶ京九鉄道が通るようになった。ここは中国四大漢方市場（他、輝州、禹州、祁州）の一つであり、また、芍薬の里として知られている。芍薬の根には止血作用があり、華佗の妻が夢の中でお告げを受けて夫に伝え、その効果が確認されたという言い伝えがある。

当地からはもう一人の有名人が出ている。他ならぬ曹操である。その華麗な経歴や人物評価について、例えば竹田晃氏は言う。「大事のためにはたとえ貴重な人命を犠牲にしても、ひとの信頼を裏切ってもやむをえないとする、冷静、いや冷酷までの決断力、法に対する厳正な態度、一軍の将としての抜群の統率力、さらにその裏にうかがわれる縦横の機転、そして大衆の心をつかむ巧みなゼスチュア……いずれをとってもまことに乱世の姦雄の面目躍如たり、といいたいところである。」（注3）

二人は同郷人として生まれたが、全く違った個性で後漢末期を生きた。片や政治・軍事・文学をリードし、片や疾病・戦争が蔓延した時代の民衆の医者たらんとした。いま、亳州市の東北に華佗庵（一七六一年設立）があり、南に曹一族の墳墓群がある。死後も宿縁が続いているかに見える。

亳州市の東方にある江蘇省の徐州市も、後述するように華佗ゆかりの土地である。ここには華祖廟と記念墓が残っている。その華祖廟に、次のような対聯がある。

医は腹を刳（さ）くを能くす　　医能刳腹
実に岐聖の門庭を別ち開く　　実別開岐聖門庭
誰か知らん　獄吏の庸才なるを　　誰知獄吏庸才
使い致（いた）りて　遺書　一炬に帰す　　致使遺書帰一炬

士は潔身を尊ぶ　　士尊潔身
豈（あ）に奸雄の左右に侍るを屑（いさぎよ）しとせんや　　豈屑侍奸雄左右
独（たた）だ憾（うらむ）む　史臣の曲筆を　　独憾史臣曲筆
「反将事を厭う」は千秋謗られん　　反将厭事謗千秋

一首目。黄帝の時代に岐伯という名医がいて、腹を割き腸を洗うことができた。華佗はその系統をうけつぐ名医だった。しかしながら、その医術は後世に伝わらなかった。獄吏がぼんくらだったので、死刑の直前に書いた貴重な遺書は灰になってしまった。

二首目。士人たるものは潔さを尊ぶ。奸智にたけた曹操の侍医など潔く受けるわけがない。ただ、怨めしいのは、真実を伝えるべき史官が筆を曲げていること。「反将厭事」などと史書にはあるが、華佗はそんな偏屈な人ではない。そんな記事は末代まで謗られるだろう。

どちらも正史の華佗伝を念頭に置くと理解しやすい。私は、特に二首目の「史臣曲筆」の一句に注目したい。華佗伝に対する不信感があるからである。「曲筆」とは具体的には何を指しているのだろうか。

一般に王朝の歴史は、その次の王朝の史官が、前王朝の膨大な記録文書や巷間の文献を参照して作る。ところが、原資料が誤っていたり、資料の選び方に偏りがあったり、意図的に改竄されたりすると、曲筆の汚名を受ける。たとえば、唐代初期に太宗・高宗・則天武后に仕えた許敬宗は、賄賂をもらうと筆を曲げ、他人の功績を書き加えたり、逆に、相手によっては罪過を書き添えたりした。『旧唐書』「許敬宗伝」には、高祖太宗実録の改竄をはじめ、数々のでたらめな所業が記されている。

さて、華佗伝にはどんな曲筆があるのだろうか。その可能性が高いのは、曹操と華佗の関係を記した部分であろう。正史には二つの華佗伝がある。一つは、宋の范曄（三九八ー四四五）の著した『後漢書』

華　佗

（繪圖三國演義　繡　像）

巻七十二、もう一つは西晋の陳寿（二三三ー二九七）の『魏書』巻二十九である。先に書かれたのは後者なので、次に『魏書』の中から、二人の関係を記した部分を引く。（　）内は筆者の補足である。傍線部分は対聯中の「反将厭事」に呼応するとみられる部分である。

太祖（は華佗の評判を）聞きて佗を召す。佗は常に左右に在り。太祖、頭風（頭痛）に苦しむ。発する毎に、心乱れ目眩む。佗、鬲（隔膜）に針うてば、手に随って差ゆ。（中　略）佗の絶技、凡そ此の類なり。然るに本は士人作り、医を以て業とせり。意常に自ら悔ゆ。後に太祖親ら理め、病を得て篤重なれば、佗をして専ら視しむ。佗、曰く、此れ近々済うこと難し。恆に攻治を事とせば（治療を怠らなければ）歳月を延ばすべし。佗久しく家に遠ければ帰らんと思う。因りて曰く、当に家書を得たれば、方に暫らく還らんと欲するのみ。家に到れば、辞するに妻の病を以てし、数々期を乞うも反らず。太祖書を累ねて呼び、又郡県に敕して遣いを発す。佗、能を恃んで食事（禄を受けること）を厭い、猶道に上らず。［到家、辞以妻病。数乞期不反。太祖累書呼、又敕郡県発遣。佗恃能厭食事、猶不上道。］太祖大いに怒り、人をして往きて検せしむ。若し妻信に病ならば、小豆四十斛を賜い、寛く限日を假え、若し其れ虚詐あれば、便ち之を収めて送れ、と。是に於いて許（許昌）の獄に傳付し、考験すれば首服せり。荀彧請うて曰く、佗の術実に工なり、人命の懸かる所なれば、宜しく之を宥すべし、と。太祖曰く、憂えず、天下には当に此の鼠輩無かるべけんや、と。遂に佗を考竟す（拷問した）。佗、死に臨んで、一巻の書を出し獄吏に与えて、曰く、此れ以て人を活かすべし、と。吏は法を畏れて受けず、佗も亦彊いてせず、火を索めて之を焼く。佗の死後、太祖の頭風未だ除かれず。太祖曰く、佗は能く此を癒す。小人は吾が病を養い、以て自ら重んぜられんと欲す。然れば吾此の子を殺さず、亦終に当に我が為に此の根原を断たざるべきのみ、と。後に愛子、（曹沖）の病み困しむに及び、太祖歎いて曰く、吾は華佗を殺しを悔やむ、此の児をして彊死（横死）せしめたるなり、と。

中田　伸一

曹操・華佗の関係について、かいつまんで言えばこうなる。曹操は持病の頭痛をおさえるために、評判の高い華佗を招いて侍医にした。その針治療はよく利いた。だが、家から手紙が届いたことを契機に田舎に帰り、妻の病を理由にして、呼び出しに応じなかった。曹操は役人を派遣して調べさせたが、結局、強権を発動して許昌の牢獄に監禁した。荀彧は助命するよう進言したが、聞かれなかった。死の直前に遺書を獄卒に託したが、受け取りを拒まれ、自ら火をつけて焼いた。後に、曹操は愛児を病死させたが、その命を救えたはずの華佗を殺したことを深く悔やむのだった。

次に、華祖廟の対聯中にある「反将厭事」を曲筆と難じている理由を考えてみる。手がかりは、傍線部にある。その文中の三文字「反」「厭（食）事」を綴ったものであろう。意味は「曹操はしばしば帰還の期日を守るよう求めたが、華佗は戻らなかった。曹操は書簡を送って呼び出したり、郡県に命じて使者をさしむけたりしたが、華佗は能力を鼻にかけ、俸禄（食事）などいらん、といった態度だった。」つまり曹操の懇ろな招請を、華佗は高慢ちきな態度で拒んだ、というわけである。いやそれは違う、というのが対聯の「反将厭事謗千秋」の言い分である。正史の記述は一方的な言い分であり、事実を歪曲している、そんな文章は末代まで謗られるだろう、と批判している。

他にも華佗に関する人物評や、曹操との関係、あるいは、逮捕されてから獄死に至る経過について疑わしい記述、または曲筆の可能性のある記述がある。それを項目ごとに挙げてみる。

〈後〉は後漢書〈魏〉は魏書の文である。

1　華佗の性格、人物について

〈後〉性悪にして意を得難し。

2　階級意識について

〈魏〉本は士人作れば医を以て業とせらる、意は常に自ら悔ゆ。

〈後〉医を以て業とせらるを恥ず。

3　帰郷後、侍医に復しない理由

〈魏〉家に到れば辞するに妻の病を以てす。

曹　操

数々期を乞うも反らず。

〈後〉妻の疾に託すに因りて、数々期して反らず。

4　侍医に服しない華佗に、曹操がとった措置

〈魏〉太祖大いに怒り、人をして往きて検せしむ。若し妻に病ならば、小豆四十斛を賜ひ、寛く限日を假え、若し其れ虚詐ならば、便ち収めて之を送れ。是に於いて許の獄に伝付す、考験すれば首服せり。

5　遺書が残らなかった事情

〈魏〉佗死に臨んで、一巻の書を出して獄吏に与へて曰はく、此れ以て人を活かすべし。吏は法を畏れて受けず、佗も亦彊いてせず、火を索めて之を焼く。

5に関連して、『三国志演義』の第七十八回の筋立ては次のようになっている。華佗は死を目前にして獄中で医術書「青嚢書」を書き、呉押獄という獄卒に後を託して死んだ。その後、青嚢書は呉が家に持ち帰り保管していたが、ある日帰宅すると妻が燃やしていた。あわてて奪い取ったが、一、二枚を残すのみだった。

以上、華佗伝についていくつかの疑問を述べた。曹操側にとって不利な記録は除かれ、有利に書き換えられた可能性がある。「史臣曲筆」という非難が民間にあったことは、華佗伝を読む場合の留意事項である。

荀　彧　（繪圖三國演義　繡　像）

三　方術使いとしての医師の座　――　「方技伝」について

次に、華佗伝を書いた側の事情を調べることにする。その人は陳寿（二三三―二九七）である。彼の前半生は、いまだ、魏・呉・蜀の三国が鼎立していた。はじめ蜀に仕えて歴史編纂を担当した。蜀の滅亡後は晋に仕えて著作郎（歴史編纂官）となり、呉の滅亡後に『三国志』を著したとみられる。蜀が滅んだのは彼が三十代のときであり、呉が滅んだのは四十代のときであるから、彼は現代史を書いたのに等しい。陳寿が仕えた晋は、魏の皇帝から禅譲された国であった。したがって、曹操の皇統を正統化することは、国体護持の上から必要であり、陳寿はそうした周りの要請を承知していたと思われる。彼もそれに応えて書いたふしがある。

一例を挙げると、『三国志』全六十五巻のうち、『魏書』に三十巻、『呉書』に二十巻、『蜀書』に十五巻が割り当てられており、魏国により多くの紙幅を割いている。また、皇帝の記録である「帝紀」は『魏書』には設けてあるが、蜀や呉の皇帝の伝記は「列伝」に含めており、地方政権なみの扱いをした。魏を正統とみなす史観が『三国志』を貫いている。（注4）

ところで、蜀に生まれて蜀に奉職したことのある陳寿は、蜀に対する思い入れも随所にかいま見える。例えば、劉備の伝記を「先主伝」、劉禅の伝記を「後主伝」と呼んで、敬意を表している。一方では、孫権を「権」と呼び捨てにしている。また、魏の文帝の死を「崩」と伝統的な用語を使う一方で、呉の孫権の死を「薨」、蜀の劉備の死を「殂」と表現して、孫権よりも格式高い用語を使っている。（注4）

陳寿は、魏を正統とする史観を貫き、魏の皇統を尊重した。曹操に対しては婉曲な、遠慮深い筆使いを示している。例えば「武帝紀」のなかには、曹操が丞相になったり、魏公を称したり、魏王を称した場合、すべて「天子が（彼に）……任じた」とか「天子が（彼に）……と名のらせた」という表現になっている。そういう書きぶりは華佗伝にも窺える。両者の確執を記すにあたっても、君主の品位を汚すような書き方を注意深く避けたとみられる。曹操をかばう意識が「曲筆」と謗られた一因ではなかろうか。

後に、陳寿が示した魏国寄りの姿勢は修正を受ける、宋の裴松之（三七二―四五一）は陳寿の使わなかった資料を注釈に加えた。そのなかに、曹操の悪しき側面を暴いた『曹瞞伝』のような書物もあった。後世の語り物や芝居や小説のなかで、曹操は悪玉として定着するが、裴松之の注釈が大いに貢献したと言われている。（注5）

次に華佗の伝記が『魏書』の「方技伝」に収められた意味を考える。「方技」という言葉は、『辞源』によると、古代の医家、卜占家、占星家、相家の総称である。同義語として「方術」があり、それに従事したのが、当時の技術的な職能者を意味する「方士」である。わが国にもなじみのある徐福は、始皇帝時代の方士であった。下って『漢書』の「芸文志」に方技の部が設けられた。その内容は「医経（医学書）」「経方（薬学書）」「房中」「神仙」の四つに分かれており、当時の「方技」の概念を示している。次の時代になるとそういう分野で活躍した人物伝が現れる。その嚆矢が『魏書』の「方技伝」であり、華佗の伝記もそこに収められたわけである。同じく「方技伝」に載っているのは、呉晋、樊阿（以上二名は華佗の弟子）、杜夔、邵登、張泰、桑馥、陳頡（以上、杜夔の弟子）朱建平、周宣、管輅である。『後漢書』には「方術伝」が置かれ、五十名ほどの方士が紹介されている。その内容は、風角（風音による占い）、望雲、省気、七政（星占い）逢占（透視術）、遁甲（変身分身術）、越方（呪術）、禁架（厭勝）、養性、神仙など多彩である。後代の『唐書』や『新唐書』になると、道教や仏教の僧侶の伝記も含まれ、更にその概念は広がったことがわかる。

これらのことから判断すると、華佗の頃の医者は方術使いの方士とみなされ、仕事内容はもとより社会的な地位は、現在とかなり違っていた。正史には自分が医師であることに誇りを持てなかったように書いてある。「本と士人作れば、医を以て業とせらる。意常に自ら悔ゆ。（本作士人、以医見業、意常自悔）」華佗は上流階層の中にあるとき、己の社会的な地位の低さを痛感したに違いない。

合理主義者の曹操は、方術を使うような人間を内心見くびっていた。また、それほど高い待遇を与えなかった。方士として仕える華佗を見る一族のまなざしを想像するのに、曹植の「弁道論」（『藝文類聚』巻七十八）が参考になる。この文章は、曹丕が太子となった建安二十二

（二一七）年以降に書かれたとみられるから、華佗の死後十年ほど後の様子を記したものである。

「世にいる方士たちを、わが王（曹操）はことごとく宮廷に招き集められた。甘陵からは甘始が、廬江からは左慈が、陽成からは郤倹がやってきた。甘始は行気導引に巧みで、左慈は房中術に明るく、郤倹は穀断ちをよくして、みな三百才になると公言している。彼らを魏国の宮廷に集められたその真意は、こうした方士連中が悪人たちとぐるになって人々をだまし、迷信をあおりたてて民衆をまどわせるのを恐れたからである。（中略）家主（曹操）から太子（曹丕）以下われら兄弟に至るまで、みなお笑い草だとして、方士などを信じてはいなかった。そうであったから甘始たちも上から与えられる待遇には一定の限度があって、俸禄も役人たちのそれに過ぎることなく、なんの手柄もないのに特別の恩賞を被ることはなかった。」

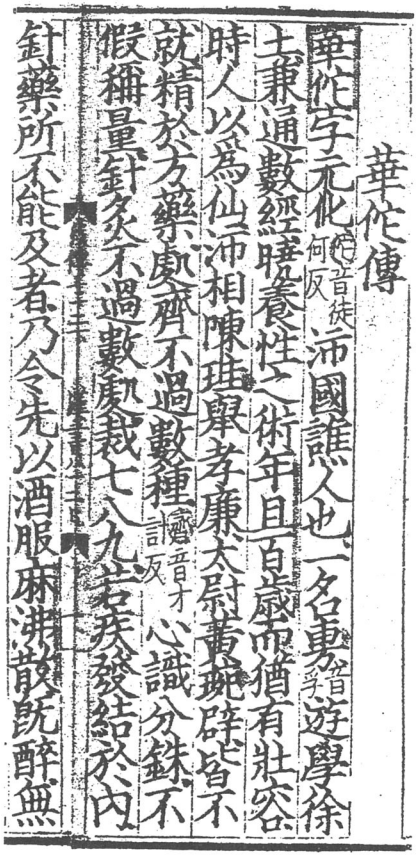
華佗が実家から連行されて獄門に下ったときに、荀彧が助命を願い出たのに答えた曹操の言葉は、侮蔑に満ちている。「荀請うて曰く、佗の術は実に工なり。人命の懸かる所、宜しく合わせて之を宥せ、と。太祖曰く、憂へず。天下に当に此のごとき鼠輩無かるべけんや、と。」（天下に、こんなネズミのような輩はどこにでもいる、と言った）」

このような蔑視と偏見から自由になろうとして、ある日の華佗が、民衆を救済する医師として、曹操のもとを離れる決意を固めたことは想像に難くない。

四　華佗の医術

彼はどんな医者で、どんな医術を施したのだろうか。まず、若い頃のこととして「游学徐土、兼通数経。」とある。徐土つまり徐州に遊学し、いくつかの経書に精通した。徐州は後漢十三州の一つで、今の山東省南部から江蘇省にかけての広い地域を指していた。当時は州の下に郡があり、東海、琅邪、彭城、広陵、下邳の五郡に分かれていた。おそらく、その中心都市の彭城に出て読書や医術を学んだのであろう。彭城は今の徐州付近の古名であり、今の徐州市彭城路という所に華祖廟と華佗の墓がある。

『後漢書』華佗伝の冒頭部分　（宋慶元本）


華佗傳
華佗字元化（音徒何反）沛國譙人也一名勇（音弔）遊學徐
土兼通數經曉養性之術年且百歲而猶有壯容
時人以爲仙沛相陳珪舉孝廉太尉黃琬辟皆不
就精於方藥處齊不過數種（譿音才詣反）心識分銖不
假稱量針灸不過數處裁七八九若疾發結於內
針藥所不能及者乃令先以酒服麻沸散既醉無

彭城は「絹の道」の延長線上にあることから、通商の拠点として栄え、外国人たちも住んでいた。また、一世紀中頃までには、仏教はこの地に伝来していた。光武帝の皇子にあたる劉英がこの町に二十年ほど住み、浮屠（仏陀）を祭ったという記録が『後漢書』にある。劉英の死後一世紀ほど経った頃、つまり華佗の在世した頃、運送業を営んで巨万の富を築いた笮融は、大規模な浮屠寺院を建立した。（『呉書』巻四）それは近郊の下邳にあった。徐州に遊学中に、外国人と交流したり、仏教の影響を受けた可能性はある。

この地域は、後漢末に頻発した動乱を避けて、多数の難民が来ていた。彼らが飢渇し、病気に冒されて落命する状況も日常的に見ていたと思われる。華佗の遊学期から少し後とみられる初平四（一九三）年には、彭城の住民数十万人が曹操によって殺されている。原因は父の曹嵩が徐州牧の陶謙の部下に殺害されたことにあった。怒った曹操は大軍を率いて、陶謙の城下に攻め込んだ。陶謙はかろうじて脱出したが、城内の男女数十万人は泗水のほとりに集められ、虐殺された。泗水はそのために流れなかった、と「陶謙伝」に記されている。華佗が曹操に召される以前の出来事とみられる。このような残虐な権力者に、華佗はどのような感情を抱いたであろうか。

徐州での遊学の成果は着実に挙がったのであろう、沛国の長官であっ

た陳珪は華佗を孝廉に推挙した。また、太尉の黄琬は自分の幕府に招いたが、いずれも断った。

華佗は養性の術（寿命を保つ技術）に長けており、当時の人々は、彼は百歳にもなるはずだと思ったが、見かけは若々しかった。また、薬の処方に詳しく、数種類の薬剤を目分量で調合し、秤などを使うことはなかった。薬を煮おわると病人に飲ませ、あとの養生法を告げてそのまま立ち去ったが、例外なく快癒した。灸をすえるのは一二カ所だけで、それぞれの個所にも、七八回を出なかったが、病気はすぐ治った。鍼をうつ場合も、一二カ所だけだった。患者にはあらかじめこれこれの場所まで刺すが、もし痛みがあったら言いなさい、と言い、患者が痛みがあります、と言うと、すぐさま鍼を抜いた。病気はこれだけでやがて治った。鍼も薬も役に立たない場合は、麻酔手術をした。

『魏書』には、患者に応じて施した治療記録（医案）が十六例ある。（佗別伝を加えると二一例）そのうち、手術は二例ある。

患者	症状	治療方法・結果・［備考］
一　甘陵の相の夫人	腹痛	投薬 堕胎 ［胎児の性別を事前に当てる］
二　県の役人、尹世	倦怠感 口乾	熱い食餌で発汗を促す 死亡 ［三日で死と告知］
三　府の役人、児尋・李延	頭痛・熱 頭痛・熱	下剤投薬 発汗を促す　［共に翌日治る］
四　塩涜県の厳昕	自覚症状なし	問診 帰路急死する ［急な発病を告知］
五　督郵の頓子献	自覚症状なし	問診・脈診 忠告に従わず三日後に死亡 ［夫人と交接しないよう忠告］
六　督郵の徐毅	他の医者に鍼を打たせた後不調	問診 死亡 ［鍼が肝臓を刺したと診断］
七　東陽の陳叔山の二歳の男児	下痢・衰弱	丸薬を投与 十日で平癒
八　彭城の夫人	さそりに手を刺されて衰弱	熱湯に患部を浸す 翌日平癒
九　郡の役人、梅平	（病気で軍務を解かれた後）	問診 その日に死亡 ［手遅れを告知］
十　ある人	咽喉閉塞し飲み下せず	道端で診る 虫を吐いて治る ［にんにく入りの酢を勧める］
十一　郡守（太守）	病	治療費をもらって治療せず、悪口を書いた手紙を遺す 憤り、黒い血を吐いて平癒
十二　ある士大夫	病	患者の希望により開腹手術 十年後に死亡 ［十年生きると告知］
十三　広陵の太守	胸がつかえ顔が赤くなり食が進まない	脈疹　煎じ薬を飲ませる 三年後に再発、死亡 ［三年後の再発を告知］
十四　魏の太祖（曹操）	頭痛	横隔膜に鍼を打つ 苦痛がなくなる
十五　李将軍の妻	重病（双子の内一人が体内で死ぬ）	脈疹　煎じ薬投与・鍼 胎児を堕胎させて治す
十六　軍吏、李成	咳	散薬投与、養生 一年で回復、十八年後死ぬ ［華佗の逮捕で薬をもらえず］

右の医案をみると、華佗の扱った医学分野は、現代の分類によれば、婦人科、内科、外科、小児科、鍼灸科などの各科にまたがっていた。診察方法は、中国医学の伝統に即して、視診（望）聴診（聞）問診（問）触診（切）の四診を用いた。患者の病状をよく見抜き、患者に説明を尽くした。今後の見通し（予後）を述べている例も多く、いずれもよく的中している。治療方法は多岐にわたっており、食事、投薬、鍼灸、温熱刺激、心理、そして最大の特徴である、麻酔手術がある。手術例は、前述のとおり、十六例中二例ある。患者の求めにより、最後の選択肢としてそれを行ったのであろう。

その他の特色として、「養生」を重視し、「五禽戯」という導引法を提唱し実践した。また、弟子の養成につとめ、呉普・樊阿の名が正史に記載されている。呉普には『呉普本草』の著書があり、樊阿は鍼灸に長じていた。正史には出ていないが、李当之という弟子は『李当之薬録』（逸書）を残したという。（注6）

華佗の医術の第一の特色である「開腹術」は『魏書』によれば次のようなものであった。

若し病結積して内に在りて、針薬の及ぶ能わざる所は、当に須らく刳割すべき者なり。便ちその麻沸散を飲み、須臾にして便ち酔死して知る所なきが如くにして、因りて破り取る。病若し腸中に在れば、便ち腹を断ちて湔洗し、腹を縫いて膏摩す。四五日にして差え、痛からず。人亦た自ら寤めず。一月の間、即ち平復す。

右の記述によると、患者に「麻沸散」を経口投与し、「酔死」状態にして患部に切り込んだ。おそらくは助手との共同作業であろう。その「麻沸散」とはいかなるものだろうか。加納喜光著『中国医学の誕生』によると、語源と素材に関して、三つの説がある。

一　江上波夫説：麻沸は『神農本草経』の麻蕡・麻勃と音通の同語。素材はインド大麻。

二　松木明知説：麻沸は「乱麻の如くして沸涌するを言う」（『漢書』王莽伝の顔師古注）とあるように、麻沸散は混乱状態を表す形容語に由来し、全身麻酔の状態、つまり、興奮期を経て意識を失う状態に入る過程を示す。その素材は曼陀羅花の可能性が強い。

三　郎才需説：麻沸は糜沸の仮借語であり、麻沸散は「それを服用したあと、頭が沸きかえる粥のように自己制御できず、昆迷知覚を失う」ことを表す。その素材は麻蕡（インド大麻）莨若（ひよす）烏頭（うず）。

ちなみに「麻沸散」が西洋に初めて紹介されたのは一八四九年のことであった。マタニスラス・ジュリアンがフランスの学士院で発表してより、その実態が問題になり、多くの研究者がインド大麻と同定した。（注7）現在、インド大麻説が最も有力視されている所以である。

その一八四〇年代というは、近代的な麻酔術の黎明期であり、重要な発見が相次いだ。ウェルズ（米国）は笑気ガスを抜歯手術に応用し、モートン（米国）はエーテルを抜歯手術に応用して成功した。ロング（米国）はエーテルを用いて頭部腫瘍の手術をし、トンプソン（英国）はクロロホルムを使って婦人科の手術をした。

ところで日本では、西欧よりも四十年ほど早い文化元年（一八〇四）に麻酔手術を成功させた医者がいた。紀州の華岡青洲（一七六〇――一八三三）である。彼は二十三歳のとき京都に出て三年間修業した。そのころから華佗の麻酔手術の再現を念じ続け、二十年近い歳月をかけて「通仙散」を完成させた。これは曼陀羅華（チョウセンアサガオ）他五種の生薬から抽出した麻酔液である。生物実験を終えた後の最終段階で、母と妻を実験台にした。母には少量を飲ませ、妻には多量を飲ませた結果、妻は失明した。その経緯については、有吉佐和子の小説『華岡青洲の妻』によって広く知られるようになった。通仙散による麻酔手術の第一号は、乳ガンを患った藍屋勘という老女であった。青洲四十五歳の、文化元年十月十三日のことである。青洲はその後三十年間に、乳ガン手術だけでも一五三例を手がけた。

琉球では、青洲よりも一一五年前の一六八九（元禄二）年に、麻酔手術があったとされる。その記録証拠が不十分なために広く認知されていないが、郷土史家の調査によると、高嶺徳明という人が、琉球王の尚貞の孫にあたる尚益の先天性兎唇を治療した。局部麻酔手術と推定される。徳明は八八年に通事として中国福州に渡ったとき、黄会友という医師に会い、二十日間、補唇手術の特訓を受け、秘伝書一巻を授かり帰国した。手術は成功し、やがて、薩摩藩の医師、伊佐敷道与

にもその秘術が伝授された。

高嶺徳明と華佗との関連性については、時間的な隔たりが大きくて知る由はない。華佗の開発した医術や麻酔薬はその死と共に歴史の闇に消えたが、精神的な遺産は残った。それは徳明や青洲を介してわが国に伝わった。

五　むすび

一九九九年のノーベル平和賞は「国境なき医師団」すなわち、世界的なネットワークをもつ医療非政府組織ＮＧＯに授与された。国境や政治的な壁に左右されずに医療援助を続けていること、あるいは素早い行動力が評価された、とのことである。

このニュースから連想されるのは、古代中国において各地を遊行しながら医療行為をした医師、扁鵲のことである。『史記』によると、弟子とともに移動した範囲は、東は斉国から西は秦国の黄河流域にまたがっている。当時、弁論術に長けた遊説家が各地を遍歴したが、扁鵲たちも各地で治療しながら医術というテクノロジーの普及につとめた。患者のいるところへ移動する「遍歴医」の存在は、職業倫理からみて、古来、一定の普遍性があるらしい。本稿で取り上げた華佗も遍歴医の面影がある。第四章七頁の表にある患者の分布から察すると、淮河流域を遍歴したことがあったのではないか。

彼の生きた後漢末期は疫病が猛威をふるった。『傷寒論』を書いた張仲景の場合は、一族二百人のうち、三分の二が病死、その七割が「傷寒」という悪疫のためであった。また、詩人の曹植は二一七年に発生した伝染病の猛威を記している。「建安二十二年（二一七）、癘気流行す。家家僵れる屍の痛みあり。室室号泣の哀しみあり。或いは門を闔じて殪れ、或いは族を覆して喪う。或いは似為えらく、疫は鬼神の作す所なりと。夫れこれに罹る者は、褐を被て藿を茹らうの子、荊室蓬戸の人のみ。」（「説疫気」）前半では疫病の惨状を述べ、後半では深刻な被害は貧民に多かったと述べている。

曹操は華佗の評判を聞いて召し抱えようとした。民衆の医者たらんとした彼にとって、窮屈であり迷惑なことであったにちがいない。おまけに当時の医師は方術使いとみなされ、士人より下層に置かれており、曹操自身そういう連中をみくびっていた。二人は根本的に肌合いの異なる人間だった。正史はそのあたりの事情について触れていない。目立つのは、曹操側を弁護するかにみえる記事である。華佗伝が「曲筆」の謗りを受けたのはそういう理由による。

二人の関係が不幸な方向へ進んだのは、第一に曹操の猖獗な人格による。第二に、独裁的な「家長」に権力が集中し、生殺与奪の濫用に走りやすいシステムに求められる。この点についてはヘーゲルが『歴史哲学講義』のなかにおいて「中国には主体性という要素がいまだ存在しない」とか「罪を問う場合には、行動者の主体的自由や道徳心の一切が否定される」と述べてその後進性を指摘したとおりであり、とりわけ曹操に対してよくあてはまる。

華佗の麻酔術は、許昌の牢獄の中で滅びた。今日の私たちはその恩恵を受けているわけではない。ちなみに現代の麻酔術の発祥地は、一八四〇年代のアメリカでありイギリスである。この技術のありがたさは、麻酔なしの治療を描写した、トールワールドの『外科の夜明け』の一節から教えられる。

> 舌腫瘍の患者を椅子から動かさぬように、腕力のある男が体幹と頭頸部をしっかり固定する。術者はピンセットで舌をつかみ、腫瘍もろとも舌先をメスでさっと切り取ったかと思うと、間髪を入れずに、出血する創部に焼きごてをしっかり押しつける。恐怖と痛みのあまり全力をしぼって後退しようとする。押さえつけていた屈強な男と椅子が一緒になって後方に退くのを、術者はなおも焼きごてを押しつけたまま追いかける。鋭い悲鳴のあとに、疲れきった静寂が覆う。患者が失神したためである。（塩月正雄訳）

欧米に近代的な麻酔術が現れる前に、華佗の「麻沸散」があり、華岡清洲の「通仙散」があったことは、それまでの東洋の医科学の水準の高さを物語る。細胞学、細菌学、薬理学、消毒法、あるいは手術器具の未発達の時代に、病苦と戦う患者の苦痛を和らげるべく、外科手術の開発に努めた人物がいた。華佗は、その第一人者であった。

中田　伸一

注記

注1　吉田荘人『中国名医列伝』（中公新書）三一頁　中央公論社
注2　陳寿『三国志』巻二九　中華書局
注3　竹田晃『曹操』（学術文庫）七一頁　講談社
注4　今鷹真『正史三国志』（学芸文庫）第一冊解説　筑摩書房
注5　井波律子「陳寿の仕掛け」『「三国志曼陀羅』所収　筑摩書房
注6　高文鋳『華佗遺書』二一頁　華夏出版社
注7　松木明知「麻酔科学史研究最近の知見」「麻酔」一九八五年二月号

全般的に参考になったものとして、
加納喜光『中国医学の誕生』　東京大学出版会

「受理年月日　一九九九年九月三十日」